

今週の為替相場見通し(2025年8月12日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.62 ~ 148.07	147.76	145.50 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		1.1528 ~ 1.1699	1.1645	1.1500 ~ 1.1780
(1ユーロ=)	(円)		169.88 ~ 172.30	171.99	170.50 ~ 173.00
英ポンド	(ドル)		1.3255 ~ 1.3459	1.3455	1.3300 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	195.04 ~ 198.83	198.68	195.00 ~ 200.00
豪ドル	(ドル)		0.6450 ~ 0.6541	0.6525	0.6450 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	94.91 ~ 96.53	96.36	95.00 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替為替営業第二チーム 原田 脩平

(1)今週の予想レンジ: 145.50 ~ 150.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

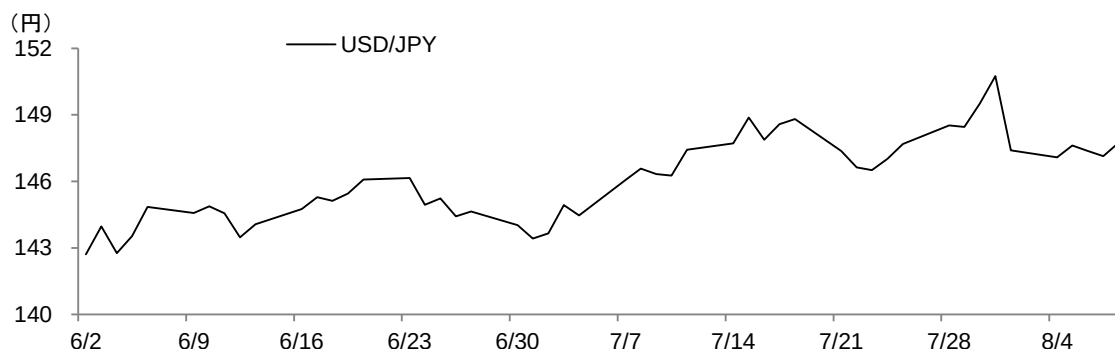
先週のドル/円相場は、1日(金)の米7月雇用統計の結果を受けて急落した流れや、FRBの利下げ期待の高まりから146円台まで何度か下落する場面もあったが、行き過ぎた利下げ織り込みが剥落した事や本邦政治への先行き懸念から円売りも入り底固い展開となった。4日は147.35円で東京時間オープン。米金利の上昇に伴い、週高値となる148.07円まで上昇。その後は米金利の低下から146円台後半まで下落した。5日は朝方からドル売りが進み週安値となる146.62円まで下落。その後は米金利上昇を受けて147円台後半まで上昇したが、米7月ISM非製造業景況感指数が市場予想を下回った事を受けて147円台前半まで下落した。6日は147円台半ばから後半で底固く推移したが、クックFRB理事が「6月・7月の米雇用統計は懸念するべき内容だ。雇用データの修正は景気の転換期では頻繁にある事だ。」と発言をした事を受けて146.99円まで下落した。7日の東京時間は147円台半ばで推移していたが、相互関税発動後にドル売りが強まり欧州時間には146.70円まで下落。その後はドルの買戻しから147.58円まで上昇したが、トランプ米大統領がクグラーFRB理事の後任にハト派とされるミラン米CEA委員長を指名した事を受けて146円台後半まで下落した。8日は自民党の両院議員総会が開催され石破首相の退陣の可能性が残ったため、円売りが進み147円台後半まで上昇し結局147.76円で越週した。週明け11日は米中の関税交渉の期限が90日間延長された事や米7月CPIへの警戒感からドル買いが進み、148.25円まで上昇した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。足許のドル/円相場は米7月雇用統計の弱い結果を受けて、9月FOMCでの▲25bpの利下げ織り込みが9割程度まで進んでいる。クックFRB理事の発言の通り、雇用データの下方修正は米経済が景気後退へと転換する発端となり、米国が利下げサイクルへと舵を切る可能性が強まっている。今週は12日(火)に米7月消費者物価指数、14日(木)に米7月生産者物価指数、15日(金)に米7月小売売上高等のインフレに関する米経済指標の発表が控えている。これらの指標が米関税政策の影響で市場予想を上回る強い結果となれば、雇用が鈍化傾向にある一方でインフレ懸念の高まりでスタグフレーション懸念が高まりドル買いは進みにくいと考える。ただ、7日(木)に相互関税が発動されたが、米国が日米合意について一部大統領令の修正で合意したとの報道があり、合意内容がいつ履行されるか不透明な部分もあり円買いも大きくは進みにくい。今週は夏休み期間で実需のフローも枯渇しており、米7月CPIのサプライズや関税に関する新たなヘッドライン次第では一方向的に値が動きやすくなる場面もあるだろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(8/4~8/8)の値動き:

安値 146.62 円 高値 148.07 円 終値 147.76 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1) 今週の予想レンジ: 1.1500 ~ 1.1780 170.50 ~ 173.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは小幅に上昇。週初4日、ユーロ/ドルは東京時間1.1588でオープンし、新規材料に乏しいなか1.15台後半で方向感なく推移。5日、米金利低下に連れられてユーロ/ドルは週安値1.1528まで下落。その後ユーロ圏6月PPIが市場予想通りとなった反面、米7月ISM非製造業景況指数が予想外に悪化したことなどから、再び1.15台後半に上昇。6~7日、ユーロ圏6月小売売上高が前年比で予想以上に上昇、クックFRB理事のハト派的な発言や米短期金利の低下にも支えられ、ユーロ/ドルは一時週高値の1.1699まで上昇。その後は利食い売りなどに押されるも、軟調な米30年債入札結果や辞任したクグラー元FRB理事の後任にハト派的なミランCEA委員長が指名されるとの観測から、下値は限定的となった。8日、ユーロ/ドルは目立った材料がないなか1.16台半ばを挟んで狭いレンジで推移し、1.1645で越週。週明け11日、米国の対中関税が11月9日まで延期との発表などを受けてユーロ/ドルは1.15台後半まで一時下落し、1.16台前半まで値を戻して推移している。

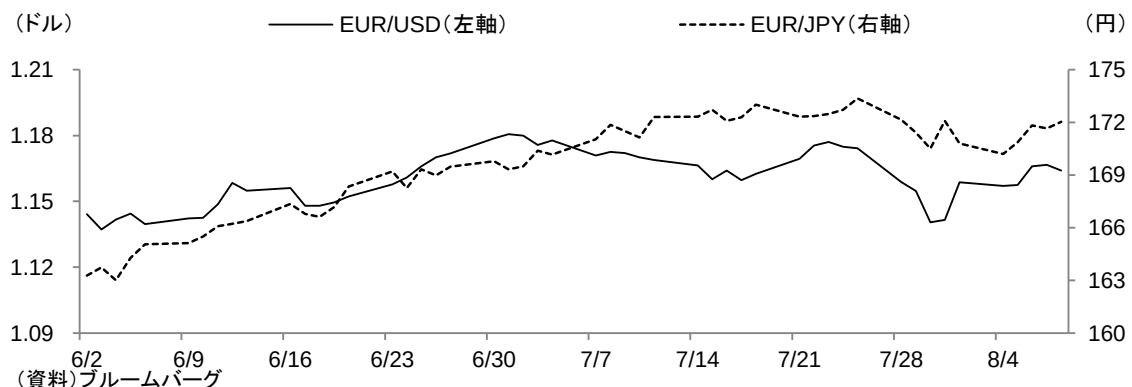
今週のユーロ/ドルは堅調に推移すると予想。EUと米国による関税合意や7日の相互関税にかかる各国上乗せ分適用開始などを受け、関税を巡る不透明感は一たび後退。金融政策がより意識されやすい局面と見ており、前回会合で追加利下げに距離を置いたECBと人事面でもハト派色が強まるFedの比較から、ユーロ買いが進みやすいと考える。欧州サイドでは、12日(火)に独8月ZEW景気期待指数が発表予定。前回対比大幅な悪化が見込まれており、依然としてドイツ経済に対して悲観的な見方が強いことが伺えるものの、IMFは最新の7月経済見通しにおいて、大規模減税や巨額の公共投資など積極財政への転換などを背景にドイツの25年度経済成長率を+0.1%に上方修正。米国との貿易摩擦を回避し、ラガルドECB総裁が新型コロナウイルス感染症やウクライナ戦争に対処した金融政策サイクルの終了を示しているもとでは、今後はユーロ圏の景気回復期待が高まりやすいと思われ、ユーロを下支えすると見る。一方で、米国サイドに目を向けると、12日(火)に米7月CPI、14日(木)に米7月PPI、15日(金)に米7月小売売上高と、複数の物価関連指標が発表予定。トランプ関税の影響から市場予想比上振れるリスクが高いと考えられ、米国のスタグフレーション懸念からドルが売られる展開を意識しておきたい。併せて、15日(金)には約4年ぶりに米露首脳会談が開催予定。パレスチナを巡り米欧の対立が深まりつつあるもとで、親ロシア的な停戦合意案などが公表される懸念はあるものの、その場合はドルが売られるなかで相対的にユーロが買われる地合いになると見ている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/4~8/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1528 高値 1.1699 終値 1.1645

(対円) 安値 169.88 高値 172.30 終値 171.99



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3600 195.00 ~ 200.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は堅調推移。週初4日は1.32台後半で始まる。前週末の弱い米7月雇用統計を受けたドル売り継続に英ポンドは堅調な立ち上がり。しかし米国時間にトランプ米大統領がインドに対して関税を引き上げるとのコメントにドル買い戻し。5日は米7月ISMサービス指数が予想を下回るもドル売りは限定的で1.3300を挟んだ値動き。6日は小幅にドルが弱含む中1.33台後半へ上昇。7日は英中銀が「タカ派的な」利下げを決定し、英ポンドは1.34台へ。週末8日も1.34台でもみ合った。英ポンドは対円で堅調推移。4日に196円レベルで始まる。週を通してドル/円の変動が限定的であったことで英ポンドの動きに沿った推移に。7日の英中銀決定を受けて198円台へ上昇した。

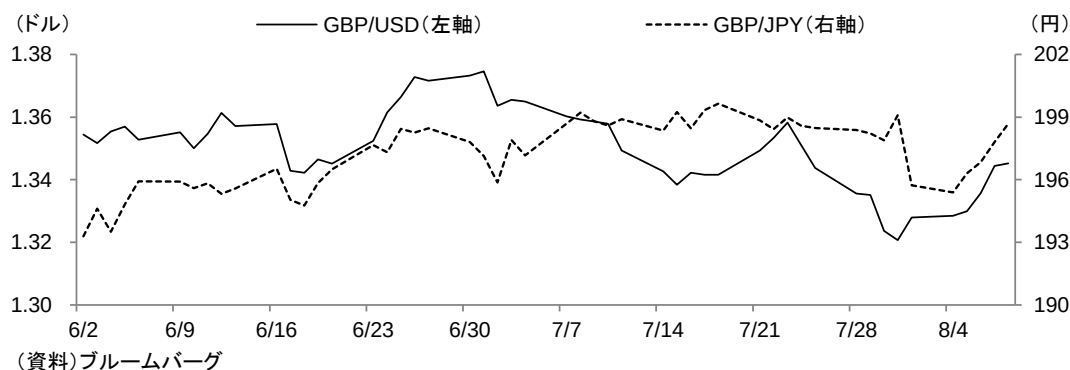
今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。指標面では12日(火)の英6月週次賃金と14日(木)の英4~6月期GDP(速報値)などが注目される。先週木曜日の英中銀決定は史上初の再投票となる票割れとなった(1回目は▲0.25%利下げ4票、据え置き4票、▲0.50%利下げ1票で、2回目に▲0.25%利下げ5票で利下げ決定)。事前予想ではすんなりと▲0.25%利下げ決定を見込んでいた分、市場は同決定をタカ派的と捉えた。また、前提となる中銀見通しもタカ派的で、2025年の成長率とインフレ率をそれぞれ引き上げた。同決定後、スワップ市場で織り込まれる英中銀利下げ確率は2025年内のあと1回利下げを7割とやや後退させた。今週発表の指標によっては英ポンドに下落圧力が一時的に強まる可能性もあるが、単発の指標のみで英中銀が見通しを変えるとは思えず、利下げ圧力の高まる米国との対比で、英ポンド堅調がベースシナリオ。また、関税・地政学関連の不透明感は引き続き英ポンドの下方リスクか。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/4~8/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3255 高値 1.3459 終値 1.3455

(対円) 安値 195.04 高値 198.83 終値 198.68



4. 豪ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6600 95.00 ~ 98.00 円

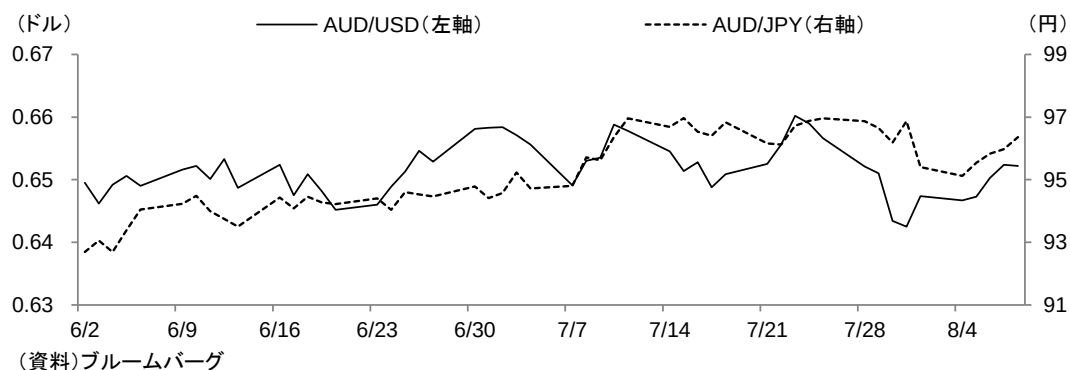
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは小幅上昇となった。週初4日の豪ドルは0.6469でオープン。シドニー休場で特段の材料がない中で前営業日の米7月雇用統計の結果を受けたドル安の流れから豪ドルは底堅い展開となり一時は0.6489まで上昇した後小幅に売り戻され0.6467で引けとなった。5日、米国7月ISM製造業景気指数が予想を下回る結果となったが豪ドルは特に反応はなく0.6450から0.6478までの狭いレンジでの取引となった。6日、豪ドルはアジア時間から堅調に推移となり節目の0.6500を超えて上昇してクローズ。7日、発表された豪6月貿易収支が堅調な結果となったことを受けて豪ドルは上昇となり、一時は週高値となる0.6541まで上昇。その後は売り戻されて再び0.6500を割れるも、FRB理事後任にトランプ米大統領の側近であるミラン氏を指名するヘッドラインが発表されるとドル安の流れとなり、0.6520台まで再び上昇となり粗い値動きとなった。8日、特段の材料はなく豪ドルは方向感のない値動きとなり、0.6520台で越週となった。

今週の豪ドルは底堅い展開を予想。12日(火)にRBA理事会を控えているが、今会合においては政策金利利下げが概ね織り込まれている状況となっている。前回7月の理事会においては、市場の予想に反して金利据え置きとしたなかで、物価動向をより慎重に見極める方向性を明確化した。今月初に発表された豪4~6月期CPIでインフレ率の低下が確認されたことや、先月中旬に発表された豪6月雇用指標も雇用者数が大幅に減少となり失業率が上昇していることも明確な利下げの材料となるだろう。現時点では更なる今後の利下げに関して言及される可能性は低く経済指標待ちとなることが予想される中、先週から続くドル安のトレンドから豪ドルは底堅い展開になることを予想する。今週発表される経済指標としては12日(火)に豪7月NAB企業景況感/企業信頼感、13日(水)に豪4~6月期賃金指数、14日(木)に豪7月雇用統計とRBAが重要視している雇用関連の経済指標の発表を控えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/4~8/8)の値動き: (対ドル) 安値 0.6450 高値 0.6541 終値 0.6525
(対円) 安値 94.91 高値 96.53 終値 96.36



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。